

ア！ 安全・快適街づくりニュース

一当NPOの街づくり提案

都市再生本部

「19年度都市再生モデル調査」に選定

- ◇ 多様な主体が参画したワークショップの開催
- ◇ 実体験が出来るイベント等の実施
- ◇ 街づくり先進地区との連携

内閣官房都市再生本部は、6月25日、平成19年度全国都市再生モデル調査について、全国各地から寄せられた489件の提案の中から先導的な都市再生活動157件を選定し、発表しました。この中に、当NPOが提案した「街づくりの担い手育成を含め、多様な主体が参画する安全・快適な街づくりの推進」が選定されました。

当NPOは、平成16年度の水防を主体にした「浸水シミュレーションによる防災街づくり」に次いで2度目の選定となります。

全国都市再生モデル調査は、「稚内から石垣まで」全国の都市再生の幅広い展開に役立てるため平成15年度から実施しているものです。

【ワークショップの開催】

定着しつつある現在のワークショップをより発展させ、地元住民、行政経験者、学生、研究者等多様な主体が参画したワークショップを開催します。

ワークショップでは、地元住民に実施するアンケート調査の結果を論議の題材として取り上げ、地区の課題の認識と解決に向けた検討を行います。

【実体験が出来るイベント等の実施】

ワークショップで考えた内容を実践する場とし、水害等が発生した場合における緊急避難路実験を実施します。また、地元住民に、安全・快適な街づくりの必要性を理解してもらうため、ゴムボートによる緊急避難について体験学習を実施します。

【街づくり先進地区との連携】

スーパー堤防事業の必要性と街づくりに対する機運を高めていくことを目的にして、水害対策先進地区での取り組みや課題解決の方策等について意見交換会を実施します。

河川環境管理財団

河川整備基金助成金申請承認

18年度に水害時の緊急避難対策を課題として展開された新小岩地区のワークショップは、河川環境管理財団の助成金を受けて実施されました。19年度は、さらに住民主体の論議を発展させるために同財団に助成金の申請をしておりましたが、7月に承認されました。このように連続して助成を受けるのは稀有なことです。



19年度総会開催 事業計画・予算等承認

平成19年度の総会は去る5月15日、葛飾区西新小岩の大成化工(株)会議室に、会員以外の地元の方や関係官公庁の方も含めて58名の出席を得て開催されました。

定期総会は、14時から、評議員会、理事会に引き続き地元の皆さんも大勢参加して開催されました。

冒頭、石川理事長より昨年度の主な活動と今後の課題について報告があり、引き続いて松田理事から「天災は忘れた頃にやってくる」と題する講話がありました。

また、徳倉副理事長から「東京都地域防災計画（素案）」に対する都民の意見募集に応じて、個人名で「荒川以東の東部低地帯に居住する120万都民に水害時のいのちの保全を」求める緊急提案を行ったとの報告があり、その概要の説明がありました。

次いで議案の審議に入り、まず第1号議案「18年度事業報告」と第2号議案「18年度決算並びに監査報告」の説明、報告があつて原案通り承認されました。

引き続き、第3号議案「19年度事業計画案」並びに第4号議案「19年度予算案」について説明がありました。

事業計画案については、事務局から第3項の「全国都市再生モデル調査」への応募について、検討の結果NPO単独で応募することに変更したが、申請した事業内容には変更は無いとの説明がありました。これらの議案に関連し、関係官公庁へ申請中の事業計画の審査の見通し、ホームページの充実策、「街づくりニュース」内容のホームページへの掲載要請等につき質疑があつた後、19年度予算案共々承認されました。

最後に、第5号議案「役員の選任」も原案通り承認され、会議は16時に終了しました。

会議終了後は、恒例の懇親会が開かれ、和気あいあいに意見の交換が行われました。締めは、地元新小岩三丁目町会長の鈴木さんによる今後の活動の意気込みの表明と3本締めて盛り上がり終了しました。

総会の質疑応答

平成19年度総会の質疑応答の一部をご紹介します。

Q1：19年度の事業計画には、都市再生本部等、現在申請中並びに要望中の案件がありますが、決定までの仕組み、決定の時期について説明願います。

A1：河川整備基金に対する申請は、既に昨年秋に行っており、目下審査中で6月末には結論が出る見込みです。

「全国都市再生モデル調査」に関する都市再生本部への申請は、葛飾区の推薦を受けて本年5月11日に申請、6月末には結果が判明する予定です。

Q2：ホームページは、最近の出来事が載っており、新鮮になってきたように思います。また、写真も多くなって見やすくなってきたと思いますが、どの位手間をかけているのですか。

また、更に魅力的なものにするためにどんなことを考えているのですか。

A2：ホームページをより魅力的なものにするには、記事の新鮮さ、写真の多用などにより、より親しみやすいものにする必要があります。

このため、トップページの刷新をはじめとして種々検討しているのでご期待ください。

Q3：「街づくりニュース」は見て分かり易いし、地元の人の発言など興味深い記事もあります。

希望者にメールを配信するような予定は無いですか。

A3：「街づくりニュース」は、年2回の発行であり、ホームページの記事からも引用しているので、そのままメール配信することは考えていません。ただ、「街づくりニュース」だけに掲載される記事もあるので、それについては、ホームページにも掲載したいと思います。



総会の様子



松田理事の講話



懇親会の様子

19年度の課題に

どう取り組むか

☆☆☆☆石川理事長に聞く☆☆☆☆

(編集) 19年度は、どんな課題に取り組むことになりますか。

(石川) まず新小岩公園の高台化の働きかけを住民の皆さんと一体となって引き続き関係機関に対し行います。

また昨年度に新小岩地区で展開されたワークショップで、水害時の緊急避難対策が論議されました。住民主体の論議が長期的な対策に発展するようワークショップの開催を支援します。

さらにこのワークショップが、地区が抱える課題の認識と解決に向けて、自発的に継続した街づくり活動に繋がるよう期待しています。そのためには、街づくりの専門家等を参画させる等、多様な主体が参画した実践的なワークショップへと展開することが必要です。

(編集) このワークショップを展開する上で重要なポイントであった河川環境管理財団と「全国都市再生モデル調査」への申請が共に承認されましたね。

(石川) これによって昨年来実施してきたワークショップを更に発展させることができます。

また19年度の主要事業である「ボートを使った避難訓練等のイベント」や「街づくり先進地区との連携」も都市再生モデル調査の対象活動として実施できます。

河川環境管理財団への助成金申請は、承認を得る上で、加藤孝明先生が土木計画学研究発表会で発表された論文が大いに寄与しました。

全国都市再生モデル調査への申請は、前回は、「水防」が主眼でしたが、今回は、「街づくり」がテーマだということを強調した結果、2回目の受託に結びつきました。

(編集) 19年度の活動の基盤づくりがうまく出来たわけですね。有難うございました。



全国川サミット

10月26～28日開催
江戸川区総合文化センター
当NPOもパネル展示

川サミットは、1級河川の名前を自治体名としている区市町村が集まり、川の恵みや脅威について、共に考え方を深め、後世に伝えることを目的として開催されます。

今回は、全国で初めて、複数の自治体が運営するサミットで、「第16回全国川サミットin荒川」として、荒川下流域2市7区が協働し、江戸川区総合文化センターで開催します。

当NPOは、10月27日の基調講演の後、当NPOの活動について紹介し、パネル展示を行います。

主催：全国川サミット連絡協議会、荒川沿川2市8区

日時：10月27～28日 10～17時

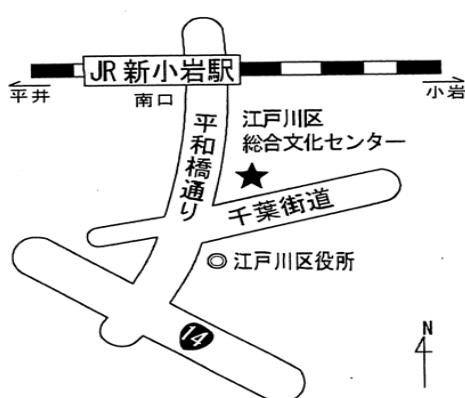
**場所：江戸川区総合文化センター
(江戸川区中央4-14-1)**

交通：バス

- JR新小岩駅南口から
江戸川高校前下車（徒歩3分）
江戸川区役所前下車（徒歩5分）
- JR小岩駅南口から
文化センター前下車（徒歩1分）

**イベント：川に関する講演、研究発表、
オーケストラ演奏、パネル展示**

問合せ先：江戸川区土木部計画課水と緑の推進係 (03-5662-8393)



葛西臨海公園「西なぎさ」で ボート乗船下船・親水体験 11月4日イベント開催

この催しは、昨年新小岩で実施したワークショップの論議により打ち出された「地域として取組むべき避難対策の実践」として行われます。

また、ワークショップに参加していない住民の方々との交流の機会として位置づけています。

イベントでは、実際にゴムボートを自ら組み立て、乗船・下船等水害時の行動を体験します。

また、水辺の生き物等の観察や解説を聞き、美味しいお弁当を食べながら交流します。

なお、この催しは、NPO「ア！安全・快適街づくり」が主催し、内閣官房都市再生本部の助成事業として行われます。

また、(財)東京都公園協会、国土交通省荒川下流河川事務所、葛飾区、江戸川区、NPO「江東区の水辺と親しむ会」、NPO「地域交流センター」が後援して開催されます。

参加方法

募集人数：先着60名様。小学生以下の場合保護者同伴を原則とします。)

参加費：無料

開催場所：都立葛西臨海公園「西なぎさ」

開催時間：9時～16時

集合場所：大成化工(株) 西新小岩3-5-1

集合場所と開催場所の往復バス(無料)を用意しています。

応募締め切り：10月19日(金)

応募方法：申込用紙により郵送又はFAXで申込。

申し込み・問い合わせ先：

NPO「ア！安全・快適街づくり」

〒124-8535 葛飾区西新小岩3-5-1

TEL・FAX: 03-3696-7480



江戸小紋染師として70年

小宮康孝

私は、1925年東京都に生まれた。江戸小紋染師の父が43歳の時の子だった。

小学校6年生の夏休みに、父にやれといわれて修業を始めた。高等小学校に行かないのはクラスで1割程だったが、父は「本なんか読めなくていい、人がやっちまつことしか書いてないから」という考え方だった。

父は、自分が生きている間に仕事を仕込んで、なんとか飯を食える様にしなければと必死だった。

でも本は必要だ。私は難しい字は読めないから、色焼けしない染料のことを研究した時、人に頼んで資料を読んで貰わなければならなかつた。

息子は高校へ行かせた。教わったことを全部覚える必要はないが、本を読むことは覚えろといった。

父は基本は教えてくれるが、そこから先は自分で考えろというやり方だった。「人に言われてやつたことは、仕事のうちじゃない」が口癖で、横着して失敗しようものなら殴るなんて当たり前だった。

「考え方、考え方」と始終言われて、寝ている間も食べている間も仕事のことが頭から離れなかつた。

それでも、吃音でうまくしゃべれない私は一生懸命仕事をした。反物に文句をつけられてもうまく言い訳できないだろう。文句の言いようの無い品物を作るのが早道だった。そういう意味で、吃音は私の人生の基本であった。

1945年春に入隊して、爆弾を抱えて戦車の下に飛び込む訓練を受けている内に終戦となつた。

戦時中、住まいと工場が爆弾で吹っ飛んでしまつたが、父は、集めた江戸小紋の型紙さえ残しておけば、誰かが後を継げるだろうと防空壕に持ち込んで守っていた。

その古い型紙を貰う話が持ち上がつたとき、父は「その金で、型紙師に頼めば、世の中に新しい型紙が生まれ、彼らの生活も助かるじゃないか」と言って職人を育てた。

そのときは、いい型紙があればいい江戸小紋が染められるのにと思ったが、職人を育てた父は正しかつた。伝統というのは、守っているだけでは衰退してしまう。伝統とは、改良の連続である。

戦後5年位経つたとき成田山にお参りに行った。その時母が着ていた色無地の羽織が色焼けしていた。こんな染料ではしょうがないと思って、きりきり舞いして染料を変えていった。

江戸小紋は、自分一人では出来ない。いい生地を作る人、いい紙を作る人、いい型紙を彫る人を探して、集めて、初めて成り立つ。最後に染める私は、皆にい仕事をしてもらえば、自分もいい仕事が出来る、いい職人に出会えた事が人生の財産である。

型紙を必死で守った父康助は、1955年、人間国宝になつたが、1966年私が36歳の時亡くなつた。

父の遺志を引き継いだ私は、40歳の時伊勢の名もない職人の喜田寅蔵という人に出会い、本物の伊勢型を見て、江戸小紋の型紙師の力が落ちていることを思い知らされ、一層型紙職人の育成に力を注いだ。

それから10年余り経ち、52歳の時私は人間国宝になつた。その頃私は色のことで大きな発見をした。

色には2種類ある。一つは、染め重ねれば黒になる色。空の青や虹、宝石などの透明に輝く色だ。天然染料で染めたものには透明感はあるけれども、染め方が悪ければ色焼けしてしまう。

そこで私は、英國の紳士服地やペルシャ絨毯のように合成染料を生地の纖維に閉じ込めて、色あせない透明度のある染色方法を取り入れた。

70台になって、私は心筋梗塞と脳梗塞を相次いで起こし2度死に損なつた。病院で自分の人生は何だったのか考えた。

父が残してくれたありがたい仕事をばか正直に続けてきたから、ご飯をたべさせてもらっているんだな、だから私の人生は棚ぼただと。

最近、地震や水害のことが気になっている。

父は、1931年に北伊豆地震（死者270人）が起きた時、小田原に行って被災地の状況を見た。

そこで瓦屋根の家が多く倒壊しているのを知り、自宅をトタン屋根に変えた。

水害についても、東南から台風がくると高潮になる、利根川・荒川が溢れたら、ここにしか水は来るところが無いと言っていた。

1947年9月のカスリーン台風の時は、堤防が決壊して大水害となつたが、父は船を用意して難を逃れ、地元の人の避難にも力を尽くした。

父は、自分の命や財産は、自分の頭で考えて守れと教え、自ら行動して範を示してくれた。

父から授かったものはいろいろあるが、これが一番のタナボタだと思っている。だから、これを次の世代に引き継いでいくのは私の義務だ。

私は今82歳となつたが、生まれ育ったこの地を安心して暮らせるようにするために、どうしたらよいか自分たちで考え、行動する必要性を切実に感じている。この思いを地元の人に伝えて行きたい。

加藤孝明先生 地域安全学会論文賞受賞

昨年来、新小岩地区のワークショップをご指導いただいた当会会員である東大の加藤孝明先生が、このほど地域安全学会論文賞を受賞されました。

この賞は、1999年に創設されましたが、これまでに東京大学の目黒先生、京都大学の清野先生の2人しか受賞されておらず、防災科学に取り組む若手研究者にとって大変価値のある賞です。

なお地域安全学会とは、1986年に設立されましたが、防災研究に関係する様々な分野の研究者が活動しています。

加藤先生の受賞について

首都大学東京 市古太郎

ワークショップのファシリテーターを務めていた加藤孝明先生に、この受賞についてホームページに寄稿をいただきました。その概要をご紹介します。



2007年5月に加藤孝明先生が「建物単体データを用いた全スケール対応出火確率統合型の地震火災リスクの評価手法の構築」で地域安全学会論文賞を受賞されました。

加藤先生は、地域安全学会初代会長である伊藤茂先生の下で卒業論文指導を受けられて以来、小出治先生、高野公男先生、山崎文雄先生といった日本の防災研究を代表する方々の下で、市街地の震災リスク、防災都市づくりに関する研究に従事されてきましたが、その蓄積が評価されたものと言えましょう。

火災被害のリスクは、これまで出火のリスクと延焼のリスクという独立した確立した組みあわせで評価されてきました。



たとえば、東京消防庁の「延焼シミュレーション」は後者を扱ったシステムです。

このシステムでは、出火点をコントローラが故意に設定することになっています。

実は私自身、まちづくりの現場で消防庁に協力してもらって延焼シミュレーションを見せることが多いのですが、地域住民へのインパクト、関心を引くには大変効果的であるものの、出火点の設定には常に気をつかっています。

加藤先生の論文は、この二つのリスクを「建物クラスター生成」という建物の密集度を表現するモデルで統合化し、出火から延焼までを「地震火災リスク」として統合的に取り扱った点に特質があります。

もちろん、論文中で展開される個々のサブモデルについても加藤先生のこれまでの研究成果を基に、丁寧に論証されており、浅学の自分にはここだけでも大変勉強になったことも特筆しておきたいと思います。

その中でも、私が興味深く感じたのは、

- ① 不燃領域率などの「延焼危険を簡便かつ大局的に捉える」市街化指標
- ② 1棟ごとに延焼シミュレーションを実施し、その期待値としてリスク評価する手法（これは①の方法と比べて大変な計算時間を要します）の中間に開発した手法が位置する、という点です。

それは、文部科学省地震調査推進本部が出している「30年以内に震度6弱以上の揺れに見舞われる確率」と同じように、例えば「30年以内に地震による火災被害にあう確率」を求める方向が見えてきたことを意味します。用いる建物データによる誤差評価など、技術的な課題はありますが、本研究成果が地震火災被害の軽減化に大きく寄与していくことは間違いないといえましょう。心より受賞をお慶び申し上げます。

第3回ワークショップ テーマ「自助、共助の備え方を考える」

コーディネーター 加藤孝明（東大大学院）

19年4月21日（土）に第3回のワークショップ（以下WS）が開催されました。

今回のWSは、一連のWSの最終回となります。今回の目的は、「自助、共助」の備え方を考えること。まちとして今後どういう取り組みを行うかを皆さんで検討しました。

今回のWSに先立ち、2月の初めに町会の方に「宿題」を出させて頂きました。

地域の「防災資源」を調べてくるという内容です。「防災資源」とは、指定避難場所、避難できそうな場所、避難手段、備蓄物資、備蓄食糧です。第3回のWSは、この宿題の成果を元に議論が進められました。

A. 町会の現状を理解する

まず、各町会の現状について地理情報システム（GIS）の出力図を見ながら、まちの現状について理解を深めました。

宿題として調べてきた地域の「防災資源」の多くは水害時に沈んでしまい、使えるものは意外と少ないと分かりました。

また町会毎に浸水状況、防災資源の分布に違いがあることが確認できました。但し、課題としては共通しており、地域全体で知恵を出し合えば解決可能ではないでしょうか。

また、想定避難人口と最大避難空間との比較が示され、避難の方法を相当工夫し、地域の力を結集すれば、全体としてなんとかなるかもしれないという見通しも分析を通して理解することが出来ました。

但し、数字上は何とかなりそうだが、課題は山積しており、非常に厳しい状況と言えます。

1回目の発表会では、各町会の状況を発表して頂き、地域全体の課題について相互理解を深めました。

B. 具体的な今後の取り組みを考える

次に今後の具体的な取り組みについて検討を行いました。それに先立って企画者側より前回の議論を踏まえた議論の枠組みが示されました。

これに基づいて各班に分かれて議論を行いました。各班とも非常に熱心な議論が行われ、議論の時間は1時間半に及びました。

I. 短期的な対策（明日からでも取り組める）

- ①安全な空間の確保
 - ②避難方法の検討と避難のための事前の準備
 - 緊急避難の際の避難手段の確保
 - 要援護者対応
 - 地域における情報収集・集約・共有
 - ③取り残された対策
 - ④啓発・教育
- ### II. 長期的な対策（10年位先を見越す）
- ①安全な空間の確保
 - ②人材の育成
- 長期的対策を維持する人材作り

[短期的な対策]としては、安全な空間を確保するために、既存のマンションとの避難協力の協定を結ぶ、或いは約束を取り付ける、新しいマンションを建てるときに避難場所を設けるルールづくりを行政に作って貰う。

[取り残された対策]としては、ポートの確保、備蓄倉庫の移設、要援護者を含め町会内に連絡網を作る等実現可能な具体的な対策が示されました。

また、[長期的な対策]としては、公園の高台化等が提案されました。

また人材育成、啓発活動を継続的に行っていくことの重要性も指摘されました。いずれもさらに検討を深めれば、実施に結びつきそうなものだと思われます。

最後に、今回の一連のWSで行われたような議論を町全体にどう広げるか、今回のWSで検討した対策をどう具体化していくのか、といった課題が出されました。

C. まとめ

「水害に対して皆さんで何ができるかを考える」と題した一連のWSは、第3回で終了となりました。

その成果は、今後の街の安全化につながるものとなりました。今後も継続的に検討を行い、取り組みを具体化していく必要があります。

今回のWSで認識された地域の危険性に対して、目の前の地域の危険性を排除すると同時に、街の将来を長期的に目指していくことも重要です。

徳倉提案の動き

徳倉副理事長は、荒川以東のゼロメートル地帯の地震水害対策について、地元の1住民の立場から積極的に問題提起をしています。

19年2月に「東京都地域防災計画」に対する意見募集に応募し、「新小岩公園の高台化」を提案しました。その後の徳倉副理事長の動きをご紹介します。

徳倉副理事長の提案

「荒川以東の東部低地帯に住む120万都民の命を水害から守る」ために7項目の実施が必要である。

1. 水位表示板の設置
2. 水没しない建物の確認
3. 近隣住民による避難の合意形成
4. ゴムボート・ライフジャケットの配備
5. 水没しない高台（救助救援基地）確保
6. 避難建物から高台への自助・共助活動
7. 住民の要望に基づくスーパー堤防建設（堤防決壊防止と避難場所の増加）

- 19.05.18. OECD未来プロジェクトの洪水地震に関する調査のためインタビューに応じる。
 - 19.07.11. 東京都総務局総合防災部に防災会議の資料請求。
建設局河川部に関係部門への紹介依頼
 - 19.07.20. 都建設局河川部に関係機関への紹介依頼。
 - 19.08.24. 国土交通省荒川下流河川事務所に提案に対する見解を質す。
 - 19.08.27. 葛飾区都市整備部に提案に対する見解を質す。
- 今後、葛飾区、江戸川区、東京都及び国土交通省の関係部署との話し合いの場を持ちながら、この提案の本質的な問題の解決策を探って行く。

OECD「危機管理調査チーム」 大成化工にインタビュー

OECDの未来プロジェクトについて、日本は洪水と地震をテーマとし、昨年フェース1として日本の施策の状況をOECDに報告しました。地震については内閣府、洪水については国土交通省が中心となっています。

本年5月18日、この報告書のフェース2としてOECDのレビューミッション4名が来日し、現地調査と関係者のインタビューが行われました。インタビューは、関係官公庁、企業、研究機関、NPO等から対象が選ばれ、その1つとして大成化工（株）がインタビューを受けました。

徳倉副理事長が社長として応じ、自身の水害体験を語り、大成化工の置かれている地理的状況を説明のうえ、私案として水害対策を短期、長期に分けて提示しました。

さらに、この水害対策の具体化を関係官公庁に働きかけているが、問題によって所管が分かれているため、考え方の統一と予算化が出来ず対策が前に進まない状況にあると述べました。

また、昨年提出されたフェース1の報告の中に地震水害の概念が欠落していることを指摘しました。

—用語説明— OECD未来プロジェクト 「リスクマネジメント」

社会・経済状況の変化等により、新たに顕在化しつつある危機（自然災害、科学技術関連事故、伝染病、食糧問題、テロ等）に対し、OECDが加盟国の危機管理施策を評価し、優良事例の紹介、今後取り組むべき施策の示唆等、加盟国への警鐘と関連施策促進等を図ることを視野に入れている。成果はOECD報告書として公表される。



O E C D国際未来プロジェクト

—洪水に対する日本のリスク管理施策に関する報告—

この報告は、リスク管理施策に関する*O E C D*プロジェクトとして、2007年5月14～19日に実施された「洪水リスク管理に関する日本の政策レビュー」の中間報告です。

本レビューは、主として、内閣府、関係官庁、東京都、埼玉県、建設・製造会社及び保険会社等の企業、研究機関並びに*N G O*の代表者に対し、インタビューの形をとつて行われました。大成化工（株）もこのレビューの対象に選ばれ、徳倉眞治社長（当*N G O*副理事長）がインタビューに応じました。

このレビューの目的は、「洪水リスクに関する日本の政策」について全般的に評価するものですが、当*N G O*の活動にとって参考になる事項を中心に概要を要約して紹介します。

1. 全般的概況

◇ 日本は、洪水のリスク管理の点で非常に進んでおり、この分野における指導的な国と見なされている。特に日本は、ハード対策としての洪水防御対策ならびにハイテクの監視及び早期警戒システムに多くのエネルギーを注いできた。

日本は構造物の洪水防御対策が非常に進んでいるが、洪水の破壊的な力を無視出来る訳ではない。大規模な洪水災害は、数十年発生しておらず、洪水リスクに関する認識は低下しつつある。とはいえ、洪水リスク管理は、引き続き日本政府にとって、地震の場合と同様、優先的事項である。

2. 法律及び規制の枠組み

◇ 津波、暴風雨や洪水などの自然災害に対する管理区域は、自然のありのままの地域に対応しており、国交省河川局の堤防によって守られた密集都市地域をまったく範囲に入れていらない。

◇ 洪水リスクの防御、予防及び緩和等リスク管理に影響を及ぼす多数の分野の立法措置を簡素化し、行政の調整機能を強化する立法措置を講ずるべきである。

3. 災害及びリスクの評価

◇ ハザードマップは、緊急時対応のためのみに利用されているが、土地利用、都市計画に関する災害情報、また設定のための基礎として用いるべきである。

◇ ハザードマップ上に示された避難場所は、洪水状況が続いた場合には不適切となる場合もある。これは海平面より下に位置する都市地域には間違いなくあてはまる。

◇ 避難場所の共同利用を実施するため地方自治体間の取り決めを完成する等、避難場所と避難問題に関する市町村間の調整を改善すべきである。

4. 河川の管理

◇ 河川及び洪水管理は、概して河川流域・氾濫原レベルで統合されたものではなく、河川の全長に沿って統合されたものでもない。ハード、ソフト両防災対策間のよりよいバランスをとるために、それに必要な予算配分を強化するために、統合的治水手法が必要である。

5. 緊急時の対応

◇ 緊急時に備えて河川改修計画や土地利用計画、建築条件を十分考慮されるよう防災当局と他の計画担当部局との定期的協力関係が組織化されるべきである。

◇ 災害に対応できない弱者に手を差し伸べるために、災害対応と社会福祉に対応する市町村部局間の協力を強化すべきである。

「魅力的な都市空間の創出」

～水辺から考える“東京”～

—石原知事と議論する会(18.08.29.)の討論より—

平成18年8月29日、石原都知事と議論する会により「魅力的な都市空間の創出～水辺から考える“東京”」をテーマに討論会が開催されました。その討論の概要を石原知事の発言を中心にご紹介します。出席者は石原慎太郎東京都知事、コメンテーターは建築家の安藤忠雄さんと銅版画家の山本容子さん、コーディネーターは講談師の神田紅さん、公募都民等が160人参加しました。

石原知事：私は知事になって益々東京に関して憤慨というか、情けない思いが募っているんです。

日本の商工会議所の最初の会頭だった渋沢栄一は、江戸の遺産である運河を評価して、東京が近代化していくことでアジアのベニスにしようという意図があったそうです。

けれども、隅田川を御覧なさい。昔は、柳橋という花街があって、和船が来て、「新内の流しがござりますけれども、お二階さんいかがですか」と。

そのうち護岸が出来て、その上がり口もふさいでしまったから、全く取り付く島が無い。

隅田川に限りませんが、日本の河川は本当に死んでしまったんです。昔の木場を用途が無くなつたので埋立して、運河が少し残っていますが、その運河がどうなっているか、行って御覧なさい。

公園を行ったり、来たりするためにかけた橋が何本もありますが、その下の水路は船が通れない。

ローボートを漕いでいって、頭を屈めなかつたら通れない。完全に運河の機能が無くなっている。

運河を使った水上レストランというのは、実は私の友人が言い出した。「昔、タグボートに引っ張られた土砂なんかを運んで捨てるパージが東京と神奈川で500パイあるんだけれども、今、つなぎっぱなしで使われない。あれを使って、レストランをやりたい」と建設省（現国交省）にいったら、あそこに実現した。

このあたりは京浜運河が流れていますが、ここよりも隅田川の方が情緒があり、歴史もある。

何での川を活かせないかと思うけれど、建物は全部背中を向いていて、川に沿ったところに裏口もないんです。

あの護岸は、崩すわけに行かないから、せめてちょっとしたモーターボートで皆さんのが散歩してぱっと上がれるような、非常に簡単な桟橋を造つていけば、賑わいも戻ってくると思います。

安藤：日本では、江戸時代に世界でも類まれに大衆文化がしっかりと根づいて、舟遊びも出来、生活を楽しんだおかげで日本人の民族の民度が上がった。外国に行くたびに、日本の民度は大変レベルが高いなと思うのですが、それがどんどん落ちてきています。こんなに急激に落ちて心配なのは、都市に遊びが無くなつて行くことです。

都市の開発のために、人間がゆっくりと遊んだり、楽しんだりする場所よりも、売り上げと利益が優先されてきました。

東京にはもともと好奇心があるところ、生活を楽しむところが確保されていたのに、今は品川、汐留あたりでも、びっしりと超高層ビルが立ちはだかっている。都心の方には風も来ないという計画は大丈夫なのかなと思います。

ロンドンでは、この20年だんだん良くなつてきて、川を向いて建物が建ち始め、テムズ川沿いを散歩出来るようになっています。

東京でも、今いわれた水上レストランに初めて行つた時は、意外と良いところがあるなどびっくりしました。そういうところがおもしろいと思う人が出て来ると、街は良くなるだろうと思います。

もともとこれだけ水運のしっかりした、海を活かした街であったわけですから、もう一回見直していくといいのではないでしょうか。

東京は、東京駅から皇居、官庁街、明治神宮までに至る縁は意外と世界でも類の無い美しさです。これをもう一段階レベルアップしたら、意外と東京もよくなるだろうと思います。

それから沢山運河がありますから、この再利用をどうするか、みんなが考えていかなければなりません。開発のスピードが上がりすぎて、今や市民にとっては楽しみの無い場所になっています。

オリンピックをきっかけにもう一段階、2段階、レベルの高い都市にならないかなと考えています。

進む中川堤防の耐震補強

中川堤防の安全性を高めるため、東京都は耐震補強工事を進めています。その概要を都の資料からご紹介します。

荒川との合流点から上平井水門までの中川左岸は、直接高潮の影響を受ける防潮堤として築造され、高い盛土の堤防が連続しています。

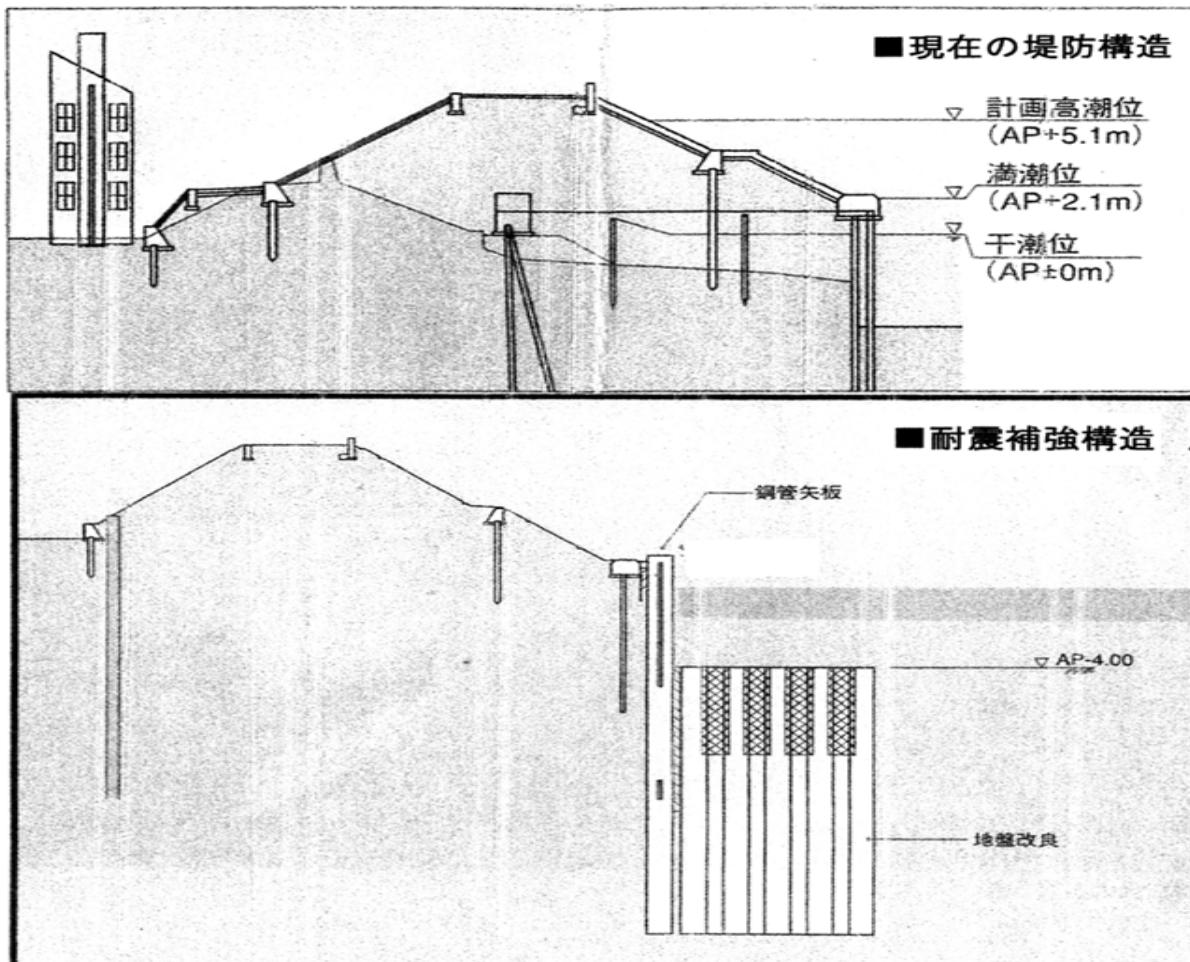
この堤防は、旧堤防の前に盛土し表面をコンクリートで覆っていますので、高潮時に中川の水位が急激に上昇しても、また暴風雨によって波が堤防を乗り越えても、多少のことでは崩壊することはありません。

7年1月に起きた阪神・淡路大震災では、中川と同じ構造の堤防が崩れ、最大で3mもの陥没が生じました。中川の堤防は、今までの調査結果から基礎地盤が液状化しやすい地質であることが判明しています。

中川左岸の低地を地震による水害から守るには、中川左岸堤防を地震力と地震によって発生する液状化の両方に強い構造としなければなりません。

このため、東京都は中川防潮堤の耐震化を緊急耐震対策事業（計画延長3,200m）として進め、13年度までに概成しています。

しかし、対象部分以外の個所で耐震点検を行ったところ、左岸の3区間総延長2,900m（総武線下流・延長340m、小松川橋上下流・延長1,800m、葛西橋上下流・延長750m）で耐震化の必要が判明しました。このため16年度に船堀橋上下流区間の設計に着手し、順次耐震化を進めています。



江戸川区松島地区に 水位表示板！

江戸川区松島地区の中川左岸の護岸堤防に、水位表示板が設置されました。施工者は江戸川区土木部で、京葉道路の北側の都道です。

また、新小岩駅南口にある松島四丁目公園にもポール等に水位が表示されました。



水位表示盤を横に見る都道



護岸堤防の壁の水位表示



ポールに設置された水位表示

荒川・隅田川贊歌 声高らかに 仙道作三さん作詞・作曲の大作

奥秩父から東京湾へ173キロを流れる荒川・隅田川をうたった交響詩が完成し、9月2日荒川区のサンパール荒川で開催された「環境フェスタ2007」で初演されました。

作詞・作曲は仙道作三さん（62歳）で、自然や人の営みを歌い上げた約1時間の大作です。

第1楽章「荒川の分水嶺」は、甲武信ヶ岳の源流から長瀬までの自然豊かな流れを描いています。第2楽章「荒川岸辺の芸術」は、長瀬から寄居へ、第3楽章「元荒川の脈流」は、熊谷から越谷へ、第4楽章「荒川支流」は、高麗川、越辺川、入間川、第5楽章「荒川の舟運」は、川越から浅草までですが、大正時代まで歌われていた新河岸川舟歌を仙道さんが発掘し、取り入れています。

第6楽章「ビオトープ・彩湖」は、秋ヶ瀬、戸田周辺、第7楽章「荒川放水路」は、川口から河口までの長年にわたる治水事業に目を向けています。第8楽章「隅田川」は岩淵水門から東京湾までの最終楽章です。

この大作は、ソプラノの東城弥恵さんの見事な歌唱力もあり、また最終章で区民から募った合唱団と区立第峡田小の児童ら200人が加わり、素晴らしいコンサートとなりました。

街づくりボランティアに 参加しましょう！

「ア！安全 快適街づくり」は、参加者を募集しています。

種類	年会費	入会金
正会員（個人）	1000	—
正会員（団体）	30000	10000
賛助会員（個人・団体）	10000	5000

発行

特定非営利活動法人

「ア！安全・快適街づくり」

〒124-8535

東京都葛飾区西新小岩3丁目5番1号

Tel・Fax 03-3696-7480

E-Mail tegami@banktown.or.jp

ホームページ <http://www.banktoen.or.jp>